

鎌倉古道

なごやの

まさがす

【2】

萱津の宿…古代、中世の交通拠点

1 古図に見える南北の道

中世の名古屋を知る上で貴重な資料があります。鎌倉円覚寺の古文書にある「尾張国富田荘絵図」です。これは14世紀に中川区付近の庄内川の流路変更による土地裁判のために作られた図面で、図の端の方に甚目寺町の萱津が描かれています(図1)。そこには「萱津宿」と書かれ、今の五条川に沿って細長く南北に延びる集落があります。道の両側は幾つかのブロックに分かれて、寺と民家があるの

が分ります。富田荘を中心に描かれた図のため街道の姿ははっきりしませんが、南北の道はそのまま現在の道路に当てはまりそうです。

京を出た鎌倉街道は近江、美濃を通り、木曾川を渡って尾張に入りました。そして南に向きを変え、黒田、一宮(一宮市)、下津(おりつ、稲沢市)を通して清須の西から萱津に達しました。このため図に宿と書かれた南北の道は鎌倉街道だと考えることができそうです。名古屋の鎌倉街道さがしは、まずこの萱津の南北の道から始まることになります。

2 萱津というところ

(1) 日本武尊の故事

萱津という地域は古くからの歴史があります。まず記紀の時代に、日本武尊が東征の最後に伊吹山に行き深手を負いました。その帰路、日本書紀では、一時尾張に還ったが宮簀姫の家に入らずに伊勢に移った、とあります。熱田神宮の資料では、草津に到り木下に居して宮簀姫を憶ったけれども遇わないまま伊勢へと転じた、と書かれています。武尊と姫が逢えなかったことからその樹を「不遇(あわで)の森」というとあります。草津は萱津のことで、この悲劇によって「あわでの森」や「あわでの浦」は有名な歌枕になり、紫式部や藤原定家など多くの歌が詠まれています。

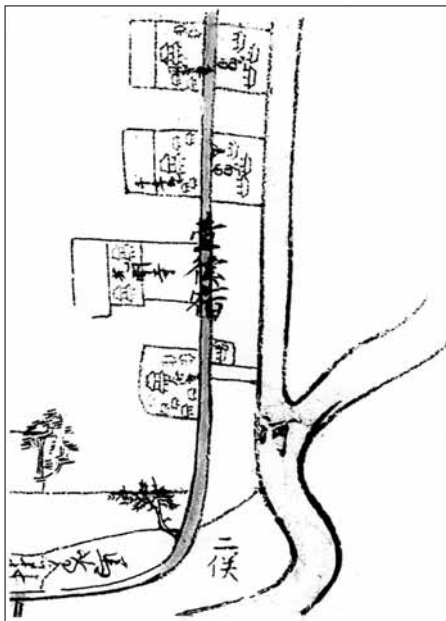


図1 富田荘絵図の中の萱津宿(部分)。上下の道が街道

(2) 古代の東海道

次に、当時の「格」(臨時の法令)を記録した『類聚三代格』の中に、8世紀、渡し船の増船の件で、木曾川、矢作川と並んで、

「尾張国草津渡三艘、元一艘、今加二艘」とあります。渡しは庄内川のことでしょう。萱津は古くは海津(かいつ)といい、また草津とも書いて「かやづ」と呼んだといえます。地元の言葉では「きゃあづ」になり、転じて萱津になったのでしょうか。

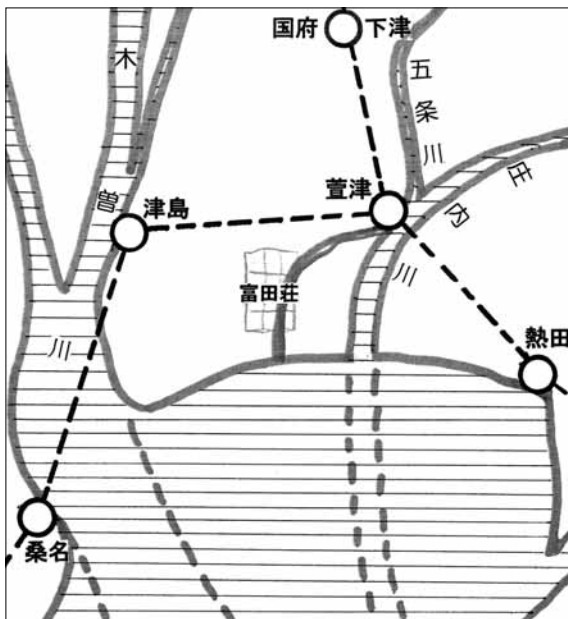
古代の東海道は大和の国を出て伊賀、伊勢、尾張、三河を通りました。伊勢の最後の駅は桑名付近とされ、そこから木曾川を渡って東に向かっていきます。当時の海岸は津島付近まで入っていたといい、古代の東海道は湾奥の海岸線に沿って、桑名→津島→萱津→と通っていたように思えます(図2)。

(3) 鎌倉街道の拠点へ

このような前史と考えると、萱津が古くから街道の拠点になったのは二つの理由が考えられます。

一つは東海道の大河の手前に立地したことです。鎌倉街道で宿になっている所には、大河や山岳の前後が多いようです。萱津は大河の前の渡しという街道の節目でした。ここで

図2 中世の伊勢湾奥と古代東海道の想定



泊った人には源頼朝など有名人にも多くの記録があります。

いま一つは伊勢路と美濃路の合流点だったことです。平安京になって都が北に動き、東国へは次第に東山道を近江から美濃に回るルートが一般化しました。このため萱津は、不破の関を通り美濃から尾張を南下する新道(美濃路)と、鈴鹿の関から伊勢を東進する旧道(伊勢路)との合流点になったのです。

(4) 鎌倉時代の「宿(しゅく)」

古代の旅は、国家が用意した駅という特定の宿舎はありましたが、一般には野宿でした。それが中世になると宿のできる過程として、初期では富や身分のある人は地元の長者の屋敷に泊まりました。萱津でも、上萱津には高見長者や上野長者、中萱津には鴻之巢長者、下萱津には真那長者などの屋敷があったといわれます。その後、街道を通る人が増えるとともに旅宿を業にする所が現れました。付近では市が開かれたり、遊女やくぐつといわれる人たちも登場して、次第に賑やかな宿へと成長していきました。

(5) 萱津の鎌倉街道

それでは萱津付近の鎌倉街道はどう通っていたのでしょうか。古い地図を見ると北の下津からの街道は、清須の西今宿を通り、五条川に沿って上萱津、中萱津、下萱津と南下し、ほぼ特定できます。難しいのは、この街道がどこで二つの川を渡ったかということです。新川は江戸時代に開削されたものなので無視するとしても、北側では先に紹介した富田荘図での下萱津の寺の前にある川への道という説があります。また南側では今の萱津橋の少し下流の月之宮神社や三社官社付近ではという説もあります。この問題は当時の五条川や庄内川の流路とも絡み、時代によっても変化していたと考えられ、残念ながらここではギブアップせざるをえません。

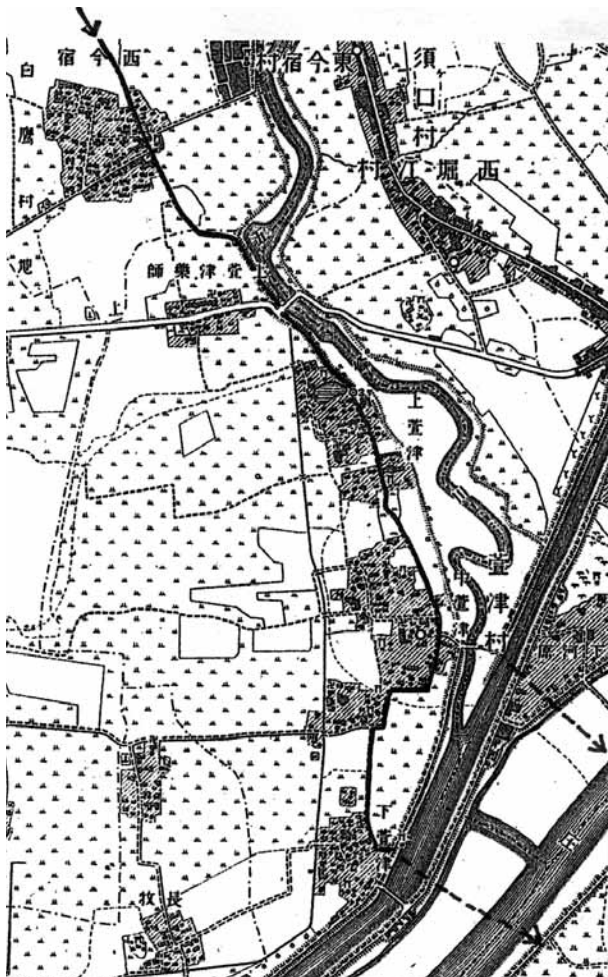


図3 明治中頃の萱津と鎌倉街道想定ルート

3 鎌倉街道をさがす

北から南に萱津付近の鎌倉街道を歩いて見ます(図3)。少し北になりますが、名鉄本線の新清洲駅を出て、西口の正面の道を西に進



「阿波手森」の碑。今は森はなくなって

みます。信号を渡り少し行くと土田公園があり、その向こう側の道が鎌倉街道の跡とされる道です。

南に進むと、点々と地蔵の石仏をまつた祠があります。ただし江戸時代以降のもので、この道はその後も歩かれていたようです。少し広い道を過ぎると街道は大きな工場の中に消えるので迂回します。

再び街道を南下すると金山神社と宝満寺のあるT字路に出ます。この辺りは西今宿といい、近くに清須城ができた室町後期には萱津の新宿となりました。金山神社は清須の鍛冶屋が勧請したものです。やがて街道は東にカーブして車の多い通に出ます。その通りを右に行き名鉄津島線を渡ると、左には五条川が迫り法界門橋になります。交差する道は津島街道(上



▲西今宿付近。まっすぐの道は清洲から基目寺へ

いろいろな伝説につつまれた萱津神社▶





萱津神社の香物殿

街道)といわれ、西に行くと1*ほどで古代からの名刹甚目寺に突き当たります。

橋を通り過ぎ、川の堤防を進むとすぐ右に「阿波手森」と彫られた石碑があります。前述したあわでの森はこの辺り一帯を指したのでしょう。その先で右に水路がありますが、これはここで取水して名古屋南部の新田を潤す萱津用水です。街道は堤防を進み萱津神社の前に出ます。

萱津神社は古くは草社、阿波手社などと呼ばれ、農耕の神、鹿屋野比売(ひめ)を奉る社で、昔はこの上萱津に広い社域がありました。この社は先にも紹介した日本武尊の伝説の地です。東征の折、ここの漬物を献上したところ「藪に神物」と言われたことから香の物の元祖となりました。域内に古式の香物殿が建っています。またここは榊の森で、「連理の枝」の霊木があったため縁結びの神でもあり、戦

前は花柳界にも人気だったといえます。

神社を出て堤防の道から分かれて旧道に入ります。坂を下ると左に**正法寺**があります。8世紀からの寺といい、広い寺域を持っていました。この寺の裏に回ると**反魂塚の碑**が立っています。前は裏の河川敷にあったもので、反魂香をたいた8世紀の悲しい「**遇わず**」の物語があります。(文献②参照)

街道を南に進むと右側に妙教寺、少し奥に妙勝寺と日蓮宗の寺が続きます。萱津の街道沿いには日蓮宗の寺が多く、また時宗の寺もあって鎌倉仏教後期の名残があります。妙勝寺は1261年、日蓮と法論して改宗、改名した高弟日妙が創建した寺といえます。

八坂神社を過ぎると中萱津に入ります。少し行くと右側少し奥に時宗の**光明寺**があります。この寺も一遍上人直弟子を開基に1283年



時宗の光明寺



日蓮高弟の開いた妙勝寺

中萱津から下萱津へ



に創建されました。2層の山門が目を引きます。寺の南には駿河から招請された三島社があります。

少し行くと、また右側に日蓮宗の**実成寺**が、寺の集合住宅のように立地しています。ここも妙勝寺と同じ日蓮高弟により、1319年の創建といえます。

この辺りから東に入る道があり、川を渡ったという説を紹介しましたが、今ではどのルートになるのかわかりません。南への道は下萱津に入りすぐ右に曲がります。次の道を南に曲り八王子社を通り過ぎてさらに南に向かいます。

道は県道を横断して少しずれますが**宝泉寺**のところで元に戻ります。道の脇に大きな松の木が2本あり、鎌倉街道の面影を残す所といわれています。左にカーブすると道路の擁壁にぶつかり、そこの階段を上ると道路の左向こうに**月之宮神社**があります。元々堤防のところで「堤の宮」ではなかったかといわれています。ここから下流200^米ほどの所に**三社宮社**があり、大きな銀杏の木が目を引きます。



寺の連なる実成寺



鎌倉街道の面影(?)を残す道

一遍上人が杖をさした所から芽を吹いたとされる木の2代目のようです。鎌倉街道は、この辺りまでに川を渡って東南に向かったと考えられます。

少し上流に歩くと萱津橋で、車の交錯する橋を渡り、続いて豊公橋を渡ります。当時、庄内川はどこを流れていたのでしょうか。そのまま進むと**豊公橋の市バス停**があります。

4 その後の萱津

古代9世紀ころから中世にかけて国土の重要幹線だった萱津は、その後どうなったのでしょうか。萱津の転機になったのは清須城が出来た時です。街道は清須の町の中に取り込まれ、街道は五条川の自然堤防に沿って東に枇杷島の方に振れたようです。川を渡って東に名古屋台地上り、熱田への道と鳴海への道になりました。一方、津島から熱田に向かう道は少し短絡した佐屋街道が出来ました。戦国時代以降、萱津はこの両方の道の間に取り残されてしまったのです。

交通路で栄えた街は交通路で滅びます。萱津の宿跡が当時の姿を多く残していてくれるのはそのお蔭なのかもしれません。

〈主な参考文献〉

- ①市史編集委員会「新修名古屋市史 第2巻」(1998、名古屋市)
- ②町史編纂委員会「甚目寺町史」(1975、甚目寺町)
- ③尾藤卓男「平安鎌倉古道」(1997、愛知県郷土史刊行会)